

## 親父の思い出

うちの親父は確か1927年（昭和2）年生まれだったと思う。私がガバナーエレクトの時に95歳で亡くなった。大往生だった。

地元（尾花沢市鶴子）の少し大きな工務店の7番目として生まれ、山形工業高校の建築科に入学したが、高校生の途中で、志願して京都舞鶴にある海軍通信兵の訓練所に入った。ところが、海軍の戦艦に実際に乗船する前に終戦を迎えた。親父は、缶詰を一杯もらって地元に戻ってきたと言っていた。

終戦後、親父は自分の実家に住み込んで大工になり、10年間ほど働いて、分家を許されて私の実家となる家を建て、そこで大工の棟梁となった。

私の小学生の頃の記憶だと、私の実家の2階には、親父の大工の弟子がいつも3、4人住み込んでいて、朝晩の食事もいつも一緒に大勢で食べた。弟子に入っている期間は5年程度だったような気がするが、みんな二十歳前後の若者でバイクに乗っていたから、私や私の兄貴たちは小学生の頃から弟子のバイクを乗り回していた。今では考えられない。

親父は、信じられないほど温厚な性格で、私や私の兄貴たちは、子供の頃から記憶のある限り、誰も1回も怒られたことがない。他人に声を荒げたことも見たことはない。一生涯である。もちろん、夫婦げんかというものも見たことがなかった。

朝早くから、とにかく黙々と働いていた。製材所も営んでいたが、私が朝起きる頃には、製材所の中をきれいに掃除して、機材や材料の木材を整理整頓している親父の姿が強く印象に残っている。

それなりに工務店や製材所の仕事もこなしていたと思うのだが、その合間に、親父はちょっとした時間を見つけては、村の小さなお寺や小さな神社の修繕の大工仕事をしていた。一生をかけてのボランティアだった。ときどき、寺の住職や神主、村の連合区長さんが、「いつも本当にお世話になっている」からと日本酒の一升瓶を持って我が家にやってきては、一緒に酒を酌み交わしていた。

とにかく、親父はこまごまと動き回り、大工の仕事に関わっていることが好きだった。兄貴からは「危ないからやめろ」と言われながら、80歳を過ぎてからも敷地内でフォークリフトを運転して木材を動かしていた。私が山形市内に家を建てて、そこでストーブを焚くようになったら、毎年、そのための薪を自分で大量に作って軽トラックに乗せて持ってきてくれた。

母親は、そんな親父のことを、「じいちゃんは大工の神さまだから」と言っていた。まさに、大工の神さまに気に入られ、大工として生き抜いた人生だった。地元ですっかり溶け込んで一生を駆け抜けた人生だった。

私は、そんな親父のことを尊敬するとともに、少しうらやましく思う。

「職業はその人の人生そのものであり、職業を通じて人格の形成を図る」とか「自分の職業を活かした社会奉仕」とか、私がこうやって机の上でかっこよく考えてみたところで、私は、親父には全くかなわないと、今さらながら思った。